

令和3年度 西南戦争歴史講座 特集一 西南戦争の好漢たちー
村田新八の西南戦争 ～田原坂周辺の戦いを中心に～ 【資料編】

※史料の引用においては、読みやすさを考慮しカタカナをひらがなに改め、一部の旧字体を常用漢字に直し、旧仮名遣いも現代仮名遣いに改め、適宜句読点を補った。

【史料1】村田新八の外見

[1-1]

新八、人と為り、状貌魁偉、身長六尺、眼光炯炯人を射る、而も举止深沈にして大度あり
(「村田新八伝」 黒龍会編『西南記伝』下巻二 P159)

※長らく、この『西南記伝』中の「村田新八伝」以外には新八についてまとめたものがなかったため、基本資料とされてきた。

[1-2]

氏齒四十許、容貌魁梧、眼光爛々、額上に刀疵あり。举止沈重、気焰自ら人を圧す
(佐々友房『戦袍日記』 P14)

[1-3]

村田さんは私達が仰いで見ねばならぬほど大きな人で、全体の身体の格好は何となく豪傑風に見えた。この点は西郷さんの青年時代と共通点がある。
(小原驪馬『西南秘史 川上親晴翁伝』 P191)

※川上親晴は加治木出身。岩熊とも親しかったという。西南戦争時は反私学校派だったために投獄され、従軍していない。ちなみに江戸時代後期の成人男性の平均身長は 155 cm程度とされる。

【史料2】

村田新八平生美術を愛し、又頗る文字に富む、彼嘗て仏国に遊びしことあり、彼が美術を愛する淵源夫れ或は幾くか其処にあらん、而して彼は軍中にも常に風琴を携帯し、容易又手を放さざりと云うなり

(小林新八『岩崎洞中記』 P57)

※文章も酷似していることから、『岩崎洞中記』の記述が『西南記伝』中の「村田新八伝」等で参照されたことは間違いない。

【史料3】

我嘗て村田に面せり対話数刻、終に其要領を得ず。彼れ性深沈寡黙、大率此の如し。而して今談話懇到、此に至る以て吾心を安んずべし。西郷に遇うも他に異聞あることなけんと、乃ち止む。

(佐々友房『戦袍日記』 P17)

【史料 4】

[4-1]

時に村田曰く、斯策尤宜し。然りと雖即今熊城攻撃中なれば、遠く西郷大将の本營を隔絶する時は軍事其都合を失い、応策其の宜きに違い、且弾薬運送も不便ならん。落城も方に日近きに在り、先つ險地に拠り接戦の便利を量り戦うに如ずと。因て吉次峠を中央とし、東方は耳取山・那智山・田原坂及ひ右翼の高山に線し、西は三の嶽より河内村に界し、悉く要所を占め哨兵を張り、敵兵寄来らば各所より直に援隊を出し急を救わんことを約す。

(「相良長良上申書」『鹿児島県史料』 西南戦争第四巻 P426)

[4-2]政府軍による田原坂の重要性についての説明

賊兵必死を期して砲壘を固守し、其の全力を田原坂の要害に尽し以て官兵の進撃に抗敵する所以の理は、此の要害は実に植木に入るの咽喉たるが故なり。(中略)賊は常に高昂の地に拠りて我を下射し、我は概子下低に在りて賊を上撃するを以て地勢に於ては初めより甚だ賊軍に利ある瞭然たり。然り而して我が連日に之を力攻して止まざるは、此の街道に出るに非ざれば大兵を熊本に進めて早く其困を解くの便路なきが故なり

(「戦闘報告第一回」明治 10 年 3 月 17 日 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C09080547500、防衛省防衛研究所蔵)

【史料 5】

(3 月 3 日の項)是より村田、篠原二氏は吉次峠の絶頂凹処に一茅屋を築き之に居り以て諸軍に指揮す

(3 月 4 日の項)因て兵を収め絶頂の茅屋に到り村田氏に面し戦状を談ず

(佐々友房『戦袍日記』 P71～73)

【史料 6】

[6-1]

賊将篠原が討死せしは賊軍中に馳騁(ちへい)指揮して居る所を近衛の士官〇〇少佐が見出し、彼は篠原なり打止めよ打止めよと令して狙撃させしより、終に弾丸の為に斃れたり。此の時賊軍にも〇〇少佐を認て頻りに狙撃せしかば、惜むべし〇〇少佐も賊の狙撃する処となりしかば、兵士等抱き起し大音に篠原は既に打取りたりと語りしかば、〇〇は細く眼を開き完爾として直に瞑目したりと。

(「京阪別報第十一回」「東京日日新聞」明治 10 年 4 月 16 日付)

[6-2]

又賊将篠原国幹が木留越に戦死せしは賊の死骸(骸カ)が懷せし日記にて判然たり。又先に村田が重傷を負いたりと言いしは村田^(マ)愼八に非ずして村田三介なりとの説あり

(「戦闘報告第一回」明治 10 年 3 月 17 日 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C09080547500、防衛省防衛研究所蔵)

【史料 7】

[7-1]

此に於て木留本營に報知の來ること櫛の齒を引くが如し、各隊長も本營雜踏し殆んど狼狽に至らんとす、時に該方面総督村田新八泰然是等に関せず高鼾して熟睡す、諸隊長空しく悶ゆると雖も如何ともすること能わず、黙坐して空しく村田が覺るを待つ。

(古閑俊雄『戦袍日記』P32～33)

[7-2]

語未だ畢らず敵丸營内に達す。満營振動、殆ど人色なし。村田氏偃臥(えんが、うつ伏せで寝る)為に動かず。徐ろに各隊長を顧使し其敗衄(はいじく、戦いに敗れる)を承けしむ。此急遽の際、未だ嘗て疾言遽色(しつげんきょしょく、早口であわてた顔つき)せず、其举措毫も平生に異ならず。

(佐々友房『戦袍日記』P88～89)

※同じ日の同じ場面だと思われるが、記録者が違うと描写も変わる。

【史料 8】

二十三日我軍を進め右は木留を攻め左は植木を襲いたるに、木留の賊壘は固うして且つ陰なり。我兵一挙して之を抜くこと能わず(中略)

二十五日我軍曉襲を謀りたるに、木留の賊兵早く我に先だち曉霧朦朧咫尺だに弁し難きに乗じて我軍の不意を襲い各壘に切り込みたり。我兵の中央先ず退く。左右翼も又勢い防戦し難きに由り、一旦は其の守地を二十三日の地位に退きたりと雖も、憤激して茲に止戦し更に隊伍を整えて進み、以て賊を破り追て今朝失う所の数壘を復せしのみならず、更に我が守線を前進し殺傷頗る多し、然れども右翼の二三壘は未だ之を復することを得ざりし也。日暮て軍を収めたり(中略)

二十八日木留の賊兵を圍繞して之を攻撃したれども、賊壘の尚ほ固うして抜けざるに由りまた軍を収めて原の守線に帰りたり。

(「戦闘報告第二回」明治 10 年 3 月 28 日 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C09080547600、防衛省防衛研究所蔵)

【史料 9】

七月三十一日

(略)諸隊宮崎を棄てて広瀬に向つて退却せり、此時村田は浴中にありしが自若として浴を取り、官軍咫尺(しせき)に逼るに及びて海岸に出でて去り、大小荷駄數根市蔵再び本營に入り書類を携へ跡を追うて退けり

(加治木常樹『薩南血涙史』 P669)

【史料 10】

十年の役、四番大隊七番小隊半隊長市来弥之助の田原に在るや、岩熊の年少なるを以て、之を

して伝令役と為し、戦線に出さしめず。一日、岩熊、命を奉じて木留に到る。時に阿父新八、牙宮に在りて諸軍を指揮せしが、岩熊の来るを見、之に命じて曰く『汝、年少宜しく陣頭に立て奮闘すべし』と。岩熊、命を領して田原に帰り、自ら進みて戦士と為り、終に植木に奮戦して之に死す。尋て弥之助木留に至り、岩熊戦死の状を新八に告ぐ。新八之に謂て曰く『児や其死処を得たり』と。復一語を發せざりしと云う。

(「村田岩熊伝」黒龍会編『西南記伝』下卷二 P494)

【史料 11】

同十五日那知山ニテ手負全三十日没ス	齋藤徹齋
同十九日田原ニテ手負全廿九日全	前田良太郎
同十七日全	諏訪昶四郎
同二十八日本留ニテ戦死	藤田四郎兵衛
同七日田原ニテ手負全二十九日没ス	安樂彦市
同二十八日加藤社邊ニテ戦死	池部宗吉
同三日田原ニテ手負全二十八日没ス	税所彦二
同二十八日植木ニテ戦死	村田岩
同日熊本ニテ全	瀬戸口喜之介
月日不詳	伊集院郷士某
同二十日植木ニテ手負	二本良和衛門

「嘉悦喜多八編輯 鹿児島縣士族戦死名録」(明治 10 年)

【史料 12】

余陽(いつわ)り叱して曰く、軽創なり何ぞ速に病院に赴かざると。直に斥候坂本次郎をして之を送致せしむ。高橋頭を掉て肯(き)かず意気慨然として曰く、其刀を敵中に遺す、深く之を愧ず。此刀を獲ざれば死すとも去らずと。余之を壮なりとし意諭して曰く、吾將に彼地を回復し刀を獲て病院に送付せんとす、子先ず之を安んぜよと。強て之を去らしむ。植木駅に至り終に暝せりと云う。

(佐々友房『戦袍日記』P82～83)

【史料 13】村田経義上申書

昨年二月十六日第三大隊(永山弥一郎隊長)三番小隊兵士にて鹿児島発程、同廿二日熊本県宇都(宇土市)の駅に至る、時に先鋒の炮声を聞や同県大工町(熊本城下)へ進入し、爰に哨兵する事二十余日にして有里村に転し番兵守備する処、田原坂敗れに拠り応援として植木に至り、対壘連戦する事三十余日にして川尻口敗れ、故に竹宮(建軍、熊本市)へ引き揚げ、未明より応援に進軍直に挑戦進撃する五六丁、戦利ありと雖其夜木山を経て川原村(熊本市)に退陣の処、敵不意に襲来、接戦卻之、追撃する事十余丁、軍曹一名生捕、暮に及て矢部に退き、夫より椎葉山の嶮を経て人吉の湯之前(湯前町)村に至る、時に正義二番中隊となる、夫より鹿児島県下牛山郷山野(大口市)に進撃す、敵は散々敗走追撃する事七里余、夫より深川(熊本県水俣市)へ退き滞陣の際分隊長となり、大口敗より木崎原(大口市)・本城・横川・大窪(霧島町)・庄内・宮崎等の戦い利無、終に延岡長井村に至り降伏仕候也、

鹿児島県第二大区壱小区

明治十一年五月

村田経義

※文中の()内の市町村名等は実際には引用元では本文横に記載。大口市は合併により現在伊佐市。

(「村田経義上申書」『鹿児島県史料』西南戦争第二巻 P197)

【史料 14】

十年の役、八月十七日、父新八の可愛嶽を突出せんとするや、此日窃に二蔵を病院より招き、之に告て曰く『我軍連敗此に至る、天也。而して余の生死未だ知る可からず。願うに汝年少にして前途猶遠し。宜しく生命を全うして、父の遺志を継ぐべし』と。手づから其携うる所の手帖と金時計とを之に与え、永訣の錠を示せり。而も突出の秘計を告げずして止む。

(「村田二蔵伝」黒龍会編『西南記伝』下巻二 P492)



ノ此フ云ト山高半ヲルア丘小ニ方左其テシニ嶽ノ三ガ峰高ノ面正
リナ所ノ設建碑歌詩テシニ峠次吉ガ置位ルス又交テニ方右ノ丘小

三ノ岳、半高山、吉次峠遠景(昭和初期発行と思われる絵はがきより)



吉次峠古写真(古閑俊雄『戦袍日記』新潮社、1986年 口絵より転載)



吉次峠(2017 年 7 月撮影)



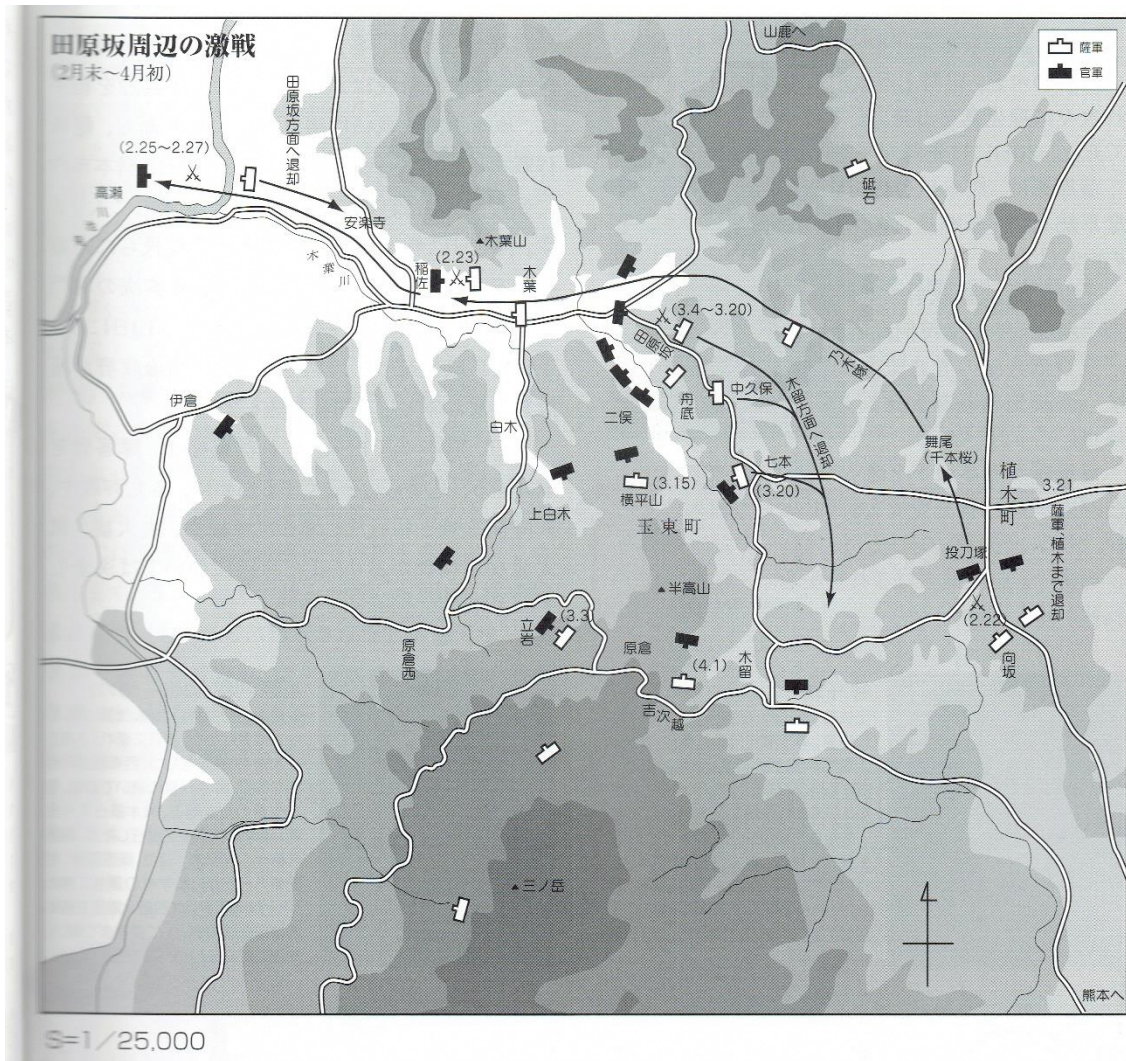
新八や篠原国幹がいた小屋があったと思われる葛山(2017 年 7 月撮影)



木留・薩軍本営跡の石碑(2017 年 7 月撮影)



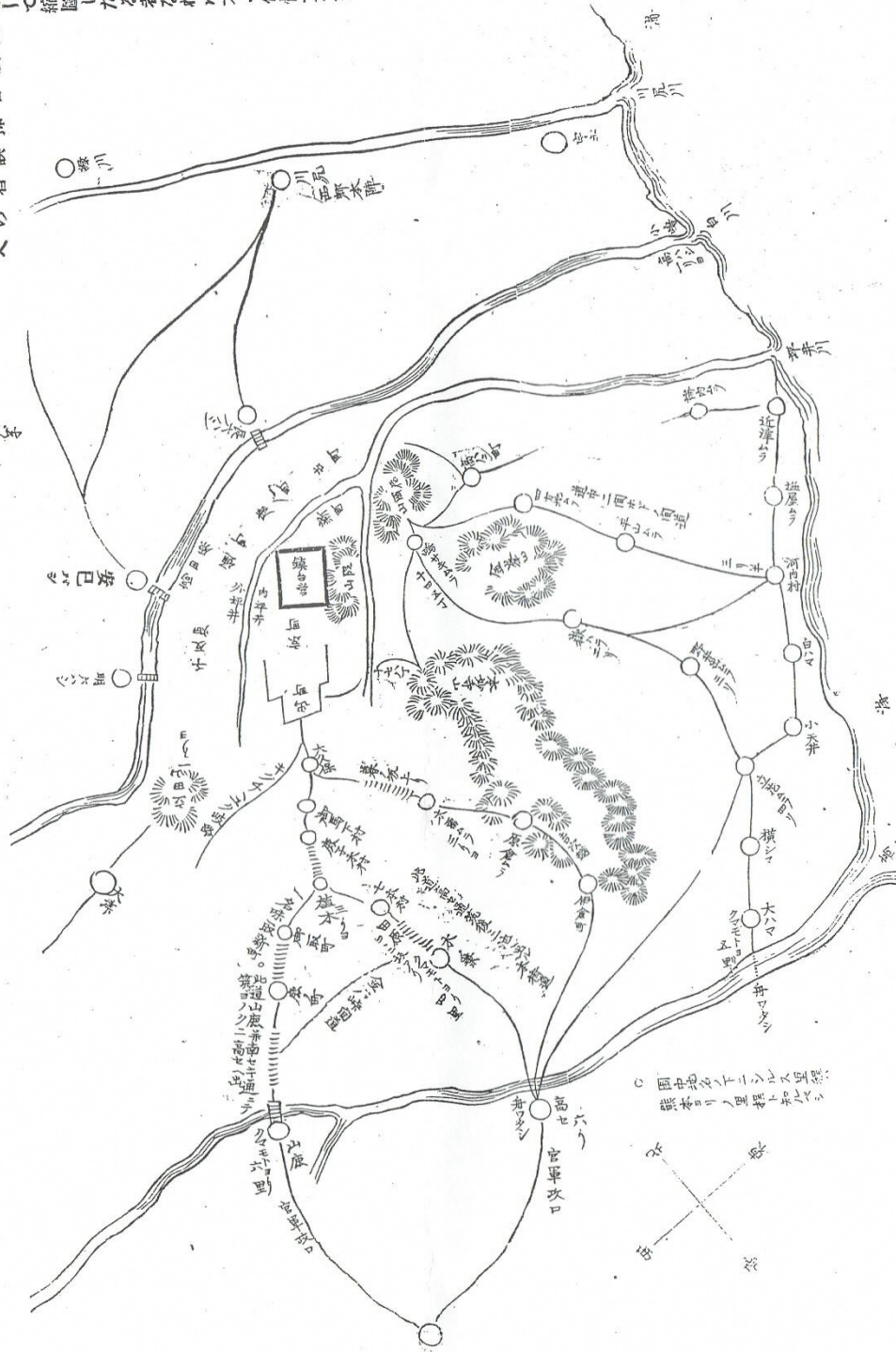
西南戦争経過図(桐野作人・則村一・卯月かいな『村田新八』洋泉社 2018 年 より転載)



田原坂周辺の激戦(植木町・玉東町西南戦争遺跡群連携保存活用協議会編『西南戦争ガイドブック 植木・玉東』2011年 より転載)

熊本戰地畧圖

圖を參考して地圖となる者なれば大なる位置方角なりしを本圖にあらわして具る者之を撰之と本日紙上にお挿す猶錯誤あらば識者正の道を賜へ



熊本戰地畧圖(「東京日日新聞」明治10年3月12日付)

※図中の方位は誤り。東西、南北が逆になっている